

ボランティア部門
(国際)
Volunteer

長濱直氏は1992年石川島播磨重工業株式会社(現・株式会社IHJ)を50歳で自主退社。それまで関心を持ち続けていた環境問題に取り組むことを決意。在職中に考案したバイオビレッジ構想実現のため中国内蒙古自治区にてボランティア活動を開始。1999年には妻である長濱晴子氏(元看護師、重症無筋力症のため参議院議員秘書を退職)も加わり、現在も沙漠化防治に向けてさまざまな活動を展開している。

推薦者 井部 俊子 聖路加看護大学 学長

なが はま はる こ
長濱 晴子
Haruko Nagahama
日本バイオビレッジ協会
事務局長
Secretary General of Japan
Biovillage Association

なが はま ただし
長濱 直
Tadashi Nagahama
日本バイオビレッジ協会
会長
President of Japan Biovillage
Association



天・地・人に感謝する

すべての調和を目指すバイオビレッジ建設構想の実現

長濱直氏が石川島播磨重工業株式会社(現・株式会社IHJ)の化学プラントエンジニアとして活躍していた1980年代、日本は高度経済成長期を迎えると同時に、公害という社会問題に直面していた。化学工場建設に従事していた長濱氏は、在職中からこの公害問題に興味を持ち、1992年、第二の人生では環境問題に取り組むことを決意し、50歳で同社を自主退職。同年に日本沙漠学会

の初代事務局長に就任した翌年、中国内蒙古自治区で*1沙漠化防治に向けてボランティア活動を開始。1999年には妻・長濱晴子氏も活動に参加。現在は、日中環境教育実践普及センターのセンター長として国際環境協力NGOの活動も行いながら、沙漠化防治の実現を目指している。

環境問題に取り組むにあたり長濱氏はまず、その解決方法として*2バイオビレッジ建



■長濱氏が育成した獣医たちと共に

設構想」を提案。この構想発案において、沙漠化問題の解決が最重要とした長濱氏は、沙漠化防止を超えた沙漠化防治に努めることを決意し、その実践の場として、日本から一番近い沙漠地である、中国内蒙古自治区通遼市庫倫旗ウルスン鎮を選んだ。同地が選ばれた理由は、距離的な要因だけでなく、地下水が豊富などの沙漠化防治の可能性の高さと、何より、「天・地・人に感謝して盃を干す」というモンゴル式の風習を持っている人々に長濱氏が心を動かされたためであった。

ウルスン鎮において長濱氏は「環境教育林」と呼ばれる

植林を開始。この植林によって植えられた50万本の木は緑豊かな農場ができるための防風林となった。また、現地での生活体験をもとに、沙漠化の原因は貧困であると実感し、貧困対策活動も開始し、1998年に日本バイオビレッジ協会を設立。翌年には同協会の事務局長として晴子氏が参加。元看護師であった晴子氏は「沙漠化防治は地球を癒すこと。看護は人を癒すこと。対象は違っても看護の考え方は同じ。」という信念のもと、看護の視点と、

厚生省看護課や議員秘書での経験を活かして、事業の発展に全面的な協力を続けている。

貧困対策を含めた沙漠化防治対策には人々の意識を変える環境教育が必須との結論に達した長濱氏は2000年、地元中学校内に「日中環境教育実践普及センター」を設立。同センターでは「民・学・官」の結果を図り、現地の人々、専門家、政府機関関係者の協力体制のもと、家畜の放牧を減らし、飼育方式に変えるなど、沙漠化防治に向けての意識改革を地元政府と協力しながら進めている。

「重いと思わないでください。持てば必ず持てます。遠いと思わないでください。歩けば必ず着きます」というチンギス・ハーンの言葉に支えられて活動を続けてきたと言う長濱夫妻。その活動が平坦ではなかったが、確実に人々の心に実を結んでいることも、この言葉に隠されているのではないだろうか。

*1 沙漠には砂・土砂利塩など多種多様な水が少なく、長濱氏は共通するのは水が少ないことからサンズイを使った「沙」を使っている。沙漠化防治は、沙漠化防止に加え、さまざまな産業を組み合わせた、持続可能な社会を実現し、永続的に土地を治めることを意味する。
*2 長濱氏が作った造詣、生命豊かな村を意味する。